

年 頭 に 立 ち て

會 長 伊 藤 隆 吉

毎年のことながら新年は我々に反省と發奮の機會を與えてくれる。俗諺に“一年の計は元旦にあり”と言うが、成る程深い自己反省と新しい奮發心を起すこの好機を空しくしてはならないと思つている。



扱て只今、私が年頭に立つて先づ考えることは、日本經濟の獨立である。經濟の根本的な建直しなくしては、眞の日本の獨立はないと言ふことである。我々は全智全能を尽くし有ゆる努力をしてその實現を期すべきであると思ふ。勿論我が鐵鋼業界においても同斷である。

昨年の我が鐵鋼業界は、御承知の通り前半期は順調に經過したかに見えたが、後半期に至り種々困難な事情の輻輳により、結果として鐵鋼價格は下降し、輸出は細り、諸會社におかれて、その運營について、夫々の御苦心を重ねられたことであつたと思ふ。然しながら大藏省の統計（1月—12月）によると、鐵鋼は約160萬噸、全額で約940億圓のものを輸出している。從來の日本輸出の大宗である綿糸、綿布の纖維工業の前同統計による750億圓を相當凌駕しているという聊か得意を感じしむる面もあつた。このことはまた巷間傳うる日本における重工業のあり方に對する種々の論議に、一つの實証的の回答を與えたものとも言い得る。今年は更に複雑なる國際情勢を反映して、我國經濟界は勿論、鐵鋼業界においても同様定まつた展望は斷言し得ないのが眞實であらう。強氣といい、弱氣といい、夫々の理由はあろうが、まづ概觀して年末までの姿に大きな變貌はあり得ないようである。采してそうであれば、本年もまた必しも樂觀は許されない。鐵鋼輸出についても、將來果して諸外國との競争に堪え得るかどうか、深甚の考慮が必要である。

ひるがえつて、我が日本鐵鋼協會はかゝる難局に處して漸く今日まで只管その使命達成のための歩みを續けて來た譯であるが、協會としても本年は會務完遂へ更に萬全の努力を傾けて行きたいと念じて居る次第であるので、この上とも諸方面の御認識と御支援を改めて御願したい。

昨年は4月1、2日東京において第43回春季講演大會を、11月2、3日第44回秋季講演大會を福岡市において開催し、共に盛會裡に終了し得た。特に福岡市における大會は殆んど地元各位の御尽力にあずかるところが多く感謝に堪えず、この機會に厚く御禮申上げる次第である。

會誌「鐵と鋼」については從來の100頁編集を120頁に増加することとし、ついで昨年の重要企画であつた本誌の英文版がほぼ完成に近い。これは諸外國の名誉會員並に關係する總ての方面に配付する豫

定であるが、以つて日本鐵鋼技術の現状を紹介し、世界鐵鋼技術界への交流の第一歩たらしめたい意向である。又鐵鋼要覽の改編委員會も現在まで既に會合の回を重ね進捗中である。其の他研究的諸集會を種々催したが、夫々大方の御賛同を得ている。又鐵鋼に関する技術向上並に業界の發展に對し貢献するため既に各部門にわたる研究會を持ち、隨時熱心な研究が行われていることは周知の事である。即ち銑鐵製鋼、鋼材に關する各部會、ロール、鑄型等に關する鑄物部會、熱經濟技術に關する部會、潤滑油に關する部會、特に鐵鋼品質管理については各部門にわたり委員會をもうけ、各部會とも數次にわたり會議を開催して、着々これを實際作業と直結せしめ、以つて“良品を安値に”の目標の下に我國鐵鋼業界の進展にいさゝかながら力を尽している。

本年もこれ等會務については、いさゝかも澁滞することなく、全力を傾けて推進する心組である。何卒昨年に倍する諸方面の御理解と御支援を重ねて懇願する次第である。

終りに臨みわが國における鐵鋼業存立の意義について一言附言したい。元來日本における地下資源の貧困をあげて、日本における製鐵業の存立困難を説く向も多い。また輸入資源についてもその半額以上を運賃に支払われる現状では製品價格の面において既に競争の困難を説かれる。然しながら、一度地球儀を前に日本の製鐵會社所在地と其の諸原料産地を按じ眺め、これを米國その他の諸外國のそれと比較すれば、成る程日本は地下資源こそ貧困ではあるが、諸原料の質、運搬距離及び其の他の條件において決して劣つていないことに氣付くであろう。即ち諸原料が適正なる價格で運搬せらるゝ場合、日本の製鐵業は決して諸外國に比し地理的條件は悪くないのである。従つて斯る原料が供給せらるゝ以上、日本における設備の合理化も相當進んでいる今日、銑鐵・鋼材の品質、價格共に充分諸外國との競争に堪え得るものと信ずる次第である。

兎も角、日本は僅か四つの小島に 8500 萬の人が犇めいて生活している。生活は食糧その他の輸入にかゝり、輸入はまた見返りの輸出にかゝつている。従つて各産業が全面的に協力稼働して國民の總てが働き生活し得る様にするのが大切である。

その爲には先づ基礎産業に重点的施策を集中し、これを育成發展せしめることが先決問題である。けだし基礎産業の充實は必然的に關連産業の展開をもたらし、それによつて國民經濟全般の繁榮が期待し得られるからである。

本年は鐵鋼業界打つて一丸となつた粉骨碎身の努力が要請されていることを痛感する次第である。

我々の最大關心事は如何にして『良品を安價に』製造するかにあることは前にも述べた通りであるが、我々の渾身の努力を尽す重点は施策的にも技術的にもこの一点にかかつていのである。この際日本鐵鋼協會としての活動の重点も又正にこゝにあることに重ねて思を深く、かつ新たにしたい。